

● シリーズ 私の見た日本 Vol.244

## 地形と街路がつくる都市空間

陳 怡華 (チン イカ)

中国上海生まれ。2025年法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程修了。現在、設計組織事務所に勤務



## はじめに

日本で生活を始めてから、街の見え方が少しずつ変わってきたように感じている。最初はただの風景として見ていた街路や建物も、日常の中で繰り返し歩き見るうちに、その形や関係性に意識が向くようになった。

特に印象的だったのは、東京の街における地形の存在である。坂道や高低差は決して特別なものではなく、むしろ日常の移動の中に自然に組み込まれている。自分が育ってきた上海のような平地に広がる街とは異なり、東京では坂道や起伏が連続し、その中を歩くことで、街の感じ方に自然と違いが生まれているように思われる。

その違いは単に地形の差にとどまらず、街路の形や人の流れ、さらには空間の使われ方にも表れているように見える。

こうした気づきは、授業で取り組んだ設計課題や、日々の散歩の中で少しずつ蓄積されたものである。本稿では、渋谷周辺の観察を手がかりに、地形と街路がどのように都市空間を形づ

くっているのかについて、自分なりに整理してみたい。

## 渋谷の地形から見えてくるもの

修士1年のデザインスタジオでは、渋谷を対象に、自らテーマを設定し設計提案を行った。その過程で、渋谷周辺について調査を行うことになった。

特に印象的であったのは、渋谷の地形である。渋谷駅周辺は谷地形に位置しており、周囲の街区はそこから徐々に高くなっている。その特徴は、例えば、本来地下を走るはずの銀座線が、渋谷では地上、あるいは高架の位置に現れることにも端的に表れており、都市の断面の特異さを実感させる。

実際に歩いてみると、駅を中心に複数の坂道が放射状に広がっていることに気づく。そして、最も低い位置にある駅周辺は交通の結節点として強い賑わいを持ち、そこから坂を上につれて、次第に住宅地へと移行し、街の雰囲気も落ち着いていく。このような高低差に伴う機能

や空気感の変化も、渋谷の特徴の一つであるように感じられた。

また、幹線道路だけでなく、その内部に入り込むように存在する細い坂道にも独特の魅力がある。例えば、スペイン坂のような路地的な坂道では、店舗のファサードが街路へと張り出し、視線や活動がにじみ出すことで、渋谷特有の密度の高い街路空間が形成されているように感じられる。

## 境界のあいまいさと街路空間

渋谷の路地に入り込むと、幹線道路とは異なるスケールの街路空間が現れる。建物と街路との距離が近く、店舗の内部と外部がゆるやかににじみ合うような風景に、多く出会う。例えば、小規模な飲食店では、カウンターや商品、看板などが街路側へと張り出し、歩行者の動線の中に自然な滞留のきっかけが生まれている。

このような状態は、単なる商業的な演出にとどまらず、街路における「視線の重なり」を生み出しているように見える。店内にいる店主や客、



渋谷の街路空間



修士1年時の渋谷に関する提案 (模型写真)

通行する歩行者が互いにゆるやかに視認し合うことで、特別な管理や監視に依存しない、日常的な「見守り」の関係が立ち上がっている。

これは、ジェイン・ジェイコブズが指摘した「街路の目 (eyes on the street)」とも重なる現象であるように思われる。人々の生活行為が街路へとにじみ出すことで、空間のあり方そのものが形づくられている。

さらに、日本の都市において特徴的なのは、この「内と外のあいまいな境界」がきわめて細やかなスケールで連続している点にある。建物のファサードは単なる境界面ではなく、街路へと関係をひらく存在となり、その結果、街路は単に通る過ぎるための場所ではなく、人が立ち止まり、関係が編み込まれていく場へと変わっていく。このように、店舗が街路へとにじみ出すことで生まれる滞留の余白は、人と人とのゆるやかなつながりを育む基盤となっており、渋谷のような高密度な都市においても、今なお街の魅力を支えているように感じられる。

## 設計を通して考えた「渋谷らしさ」

こうした気づきを踏まえ、再開発によって変化しつつある渋谷において、その空間的な性格をどのように引き継ぐことができるのかを考えた。提案では、「坂道のようなつながり」をキーワードとし、ハチ公広場から駅上部へと至る動線の中に、店舗や情報発信の場、そして人が滞留できる余白を挿入した。単に移動するだけの経路ではなく、街の延長としての公共空間を駅内部に引き込むことを意図している。

地形的な連続性と、街路に見られる滞留の仕組みを重ね合わせることで、渋谷らしさを空間

として捉え直すことを試みた。

## 地形の違いが生む街のかたち

この課題をきっかけに、私は東京の地形そのものに関心を持つようになった。

東京の街を広い視点で見ると、東部と西部で街路の構成が大きく異なっていることに気づく。新宿区や渋谷区などの西部では、道路は比較的細く、曲がりながら続いていることが多い。これは、武家地として発展してきた歴史や、地形に沿った街路形成の影響が残っているためだと考えられる。

また、この地域は台地が多く、坂道が日常の中に現れる。神楽坂のように、坂の上と下で街の表情が変化する場所も少なくない。坂、谷、そして川といった要素が重なり合うことで、街は平面的ではなく、立体的な構造を持つようになる。

一方で、浅草や銀座、台場といった東京東部の地域では、比較的広く直線的な街路が多く見られる。低地や埋立地として発展してきた背景から、街路はより計画的に整備されている。こうした違いを歩きながら感じていると、都市のかたちは地形や歴史と深く結びついているのだと、改めて実感する。

そして、このように整然とした街路が広がる東京の東部を歩いていると、自分が育ってきた上海の街並みと重なる感覚を覚えることがある。広く平坦な地形の上に形成された街では、直線的な道路と大きなスケールが空間の基調となっており、その点において、東京の東部と上海のあいだにはどこか共通する印象があるように思われる。

## 写真から見えてくる坂道の魅力

普段から街を歩くなかで、気になった風景を写真に収めることが多い。そうした視点から見ても、坂道の多い街路は特に魅力的に感じられる。傾斜のある道や曲がり角は、視線の抜け方に変化を生み、空間に自然と奥行きや重なりを与えているように思われる。

例えば、銀座のような直線的な大通りでは、建物と道路が一点へと収束していく、明快で安定した構図が生まれる。一方で、坂道や曲がりくねった路地では、視線の先が一定に定まらず、場面ごとに異なる広がり立ち現れる。そのため、歩くたびに風景の見え方が少しずつ変わり、予測しきれない風景の重なりが生まれていく。こうした感覚もまた、東京の街が歩くことそのものを楽しめる場所であると言われる理由の一つなのかもしれない。

## おわりに

日本で建築を学び、日常の中で街を歩くなかで、私は東京という都市の魅力を少しずつ実感するようになった。特に、地形の起伏や街路のあり方、そして人の活動がにじみ出すような公共空間のあり方は、これまでの自分の都市観を静かに更新しているように思う。

それは何か明確な結論として言い切れるものではない。ただ、歩くたびに少しずつ理解が深まり、そして、その積み重ねの中で、少しずつ自分なりの都市の見方が形づくられていくように感じている。



渋谷の坂道



銀座中央通り



上海の南京路